

接触場面の参加者の役割から見る 社会文化能力の習得

——インターアクション場面のケーススタディから——

薄 井 宏 美

1 はじめに

実質行動を行うためには、そこで使用されている言語のみならず、社会文化的な場面や事柄に対する知識やそれらに対して自分がどのように行動するかといった判断などが必要である。日本語教育において、社会文化知識や文化についての教育、研究が行われてはいるが、まだ十分であるとは言えない。ネウストブニー（1995a、2002）でも日本語教育に社会文化行動の教育を取り入れるべきだということが提唱されている。また、ネウストブニー（1995a）は、日本語教育の目標は文法能力でもコミュニケーション能力（文法能力と社会言語能力）でもないとし、その目的は実質行動を行えるようにすることであるとしている。それは、実質行動を行うためにコミュニケーションを行っているという考えに基づいている。

このようなことから本研究では、日本語非母語話者⁽¹⁾がどのような社会文化能力を持っているのか、それをどのように利用しているのか、また、新たな規範⁽²⁾や知識をどのように得ているのかという、社会文化能力の習得プロセスを明らかにすることを目的とする。そして、その過程で見られた接触場面のインターアクション場面における参加者の役割を記述する。

2 先行研究

2.1 文化の定義

日本語教育に限らず、これまでの研究で「文化内要素」を扱ったものは「文化」の定義があいまいで（ネウストブニー、2002：5）、「社会言語学的要素」が含まれていたり、異文化適応の観点から非母語話者の心理的側面を扱ったものが多い。例えば、牧野（2003）では、文化を「ある社会の成員によって習得され、共有され、伝達されている（言語を含む）様々なコミュニケーションの様式」（p. 1）と定義している。そして、ウチ的な文化からソト的な文化へといった具合に日本語教育の体系に取り入れていくことを提案してい

る。また、田中・秦（1996）では、文化理解のレベルとして、語義的理解・文脈的理解・社会的理解の3つのレベルを挙げ、よりコミュニケーションに即した文化教育の必要性を主張している。しかし、それらは日本語非母語話者がインターアクションを行っていくに際して範囲が広すぎたり、逆に狭すぎたりして、どちらの場合もあまり現実的ではない。それよりも、日本語非母語話者がインターアクションをする際に実際に必要としている「文化」に焦点を当てるのがより必要ではないだろうか。そのため、「文化」と「社会言語」を区別し、また、非母語話者の心理的側面に焦点を当てるよりもむしろ、それがどのようなプロセスを経て習得されているのかに焦点を当てる必要があると考える。社会文化能力の習得を詳細に扱った研究は、Fairbrother（1999）、村岡（2003）を除いてほとんどないと言ってよい。

社会文化能力とは、コミュニケーション行動以外の実質行動（日常生活、仕事、遊びなど）を行う能力である（Neustupný 1995）。Neustupný（1995、1997）では、インターアクションに関する能力として、言語能力、社会言語能力、社会文化能力をあげ、言語能力と社会言語能力をあわせたものをコミュニケーション、3つの能力をあわせたものをインターアクションとしている。コミュニケーションは言語能力なしでも起こり、インターアクションはコミュニケーションなしでも起こる。

このようなことから本論では、社会文化能力という概念を利用することにした。

2.2 文化の管理と習得

異文化適応や文化習得を扱っている先行研究は、アンケートや、日本での印象的な体験を報告させるようなものが多い（田中他（1990）、金田（1998）など）。それに対して、Fairbrother（1999）、村岡（2003）では、具体的なデータによって習得のプロセスが扱われている。この2つの研究はどちらも言語管理理論（Neustupný 1985）を基礎として分析が行われている。言語管理理論は、規範からの逸脱から始まる。規範とは、個人のインターアクションを方向づける基盤となるものである。そして、その規範からの逸脱の留意、留意された逸脱の評価（肯定的評価・否定的評価）、それらに対する調整計画、調整計画の実行という一連のプロセスを経る（Neustupný 1985, 1994）。このプロセスは、逸脱から調整の実行までの全てのプロセスが常に存在するわけではなく、途中で終わることもある。

Fairbrother（1999）は、日本語母語話者（以下、NS）と日本語非母語話者（以下、NNS）の文化的逸脱をどのように管理しているかという文化管理（cultural management）を扱っている。その結果として、NNSが自分の母語規範（native norm）とは異なる規範、接触場面規範（contact situation norm）も持っていること、NSは共通の規範を持っているわけではなく、また、同じような管理を行うわけでもないこと、強い否定的評価は言語的逸脱に対しては見られず文化的（社会言語的、社会文化的）逸脱に対してのみ行われていたことなどを明らかにした。また、文化管理のプロセスをより詳細に記述している。

村岡（2003）は、日本語を母語としない海外出身者へのインターアクション・インタビューから社会文化能力の習得プロセスを考察している。ここでの社会文化能力の習得プロセスには、「日本の社会文化能力をどのように習得し、あるいは習得しないのか、どのような

プロセスにより日本の社会文化に接近し、あるいは疎隔していくのか」(p. 458) という視点が含まれている。そのような習得プロセスを、言語管理理論 (Neustupný 1994) に基づいて分析し、管理の行われた領域、社会文化能力の下位分類、海外出身者のネットワークという観点から分析している。

本研究でも、実際のインターアクションのデータを元に、社会文化能力の習得のプロセスをより具体的に提示することを目指す。

2.3 参加者の役割

接触場面における参加者の役割については、まず、Fan (1994)、ファン (1998) の言語ホストと言語ゲストの役割が挙げられる。Fan (1994) では、フォリナートーク研究に対して、なぜ母語話者がフォリナートークをし、会話を理解するための責任感を持つのかという点に着目し、話者の調整ストラテジーの選択は、相手に対する態度に影響され、その態度は話者が参加している場面で持っている役割によって決定されるとしている。母語場面であれば話者は、階級、地位、性別、年齢などの社会的価値によって自分の役割が分かるが、母語話者と非母語話者が参加する接触場面つまり、相手言語接触場面においては、参加者の関係はホストとゲストという関係になるとしている。ファン (1998) には言語ホストと言語ゲストの参加調整として、それぞれの自己参加の調整と他者参加の調整がリスト化して示されている。

また、宮副 (2003) では、「参加者の談話上の役割」として、エキスパート・非エキスパート、文化的ホスト・文化的ゲスト、質問者・被質問者という役割が挙げられている (p. 171)。

情報ホスト・情報ゲストという役割については、伊東 (2004) で触れられている。伊東 (2004) では、ハンガリーで日本語を学ぶ学習者 (ハンガリー人) が日本人に観光地を案内する案内場面を分析している。その中で「案内場面ではJは言語ホストと情報ゲスト、Mは言語ゲストと情報ホストという2つの役割が同時に存在⁽³⁾」(p. 103) していると述べ、この2つの役割関係が日本人参加者とハンガリー人参加者の言語管理に影響しているとしている。

観光場面 (案内場面) における参加者の役割については由井 (2003) でも触れられている。由井 (2003) は、「観光場面全般にホスト側は説明をするという規範が働いている」(p. 377) と考察している。さらに、接触場面の構成要素の1つとして「機能」を挙げ、観光場面では、案内説明することが主な機能であり、「観光場面の場所決めにおいて、単に説明するだけでなく、相手の経験を聞く、勧める、比較して例示する等の機能の単位も見られた。」(p. 379) ことを報告している。

以上のように、文化の習得を扱う際には、まずその範囲を明確にし、そのプロセスを扱う必要があると考えられるが、そのような先行研究はわずかである。また、参加者の役割を扱っている先行研究は、NSとNNSの談話における役割の一部を明らかにしているが、Fan (1994)、ファン (1998) の言語ホスト・ゲストの役割以外は明確な定義づけが行われていないという問題点もある。

3 調査

3.1 調査方法

調査は2005年5月から7月にかけて行われた。調査には、インターアクション・データの録音とフォローアップ・インタビューの2つの方法をとった。

まず、友人同士のNSとNNSに、「どこかへ出かける」というタスクを与え、その間のインターアクションを録音した。2台のICレコーダーを用い、外付けのマイクを調査対象者それぞれの襟元に装着して録音を行った。録音に際しては、調査対象者がインターアクションや会話の話題によってICレコーダーを操作できるよう、あらかじめ、操作方法を簡単に説明した。

次に、1週間以内に調査対象者にフォローアップ・インタビュー（以下、FUI）（ネウストプニー 1994、ファン 2002）を行った⁽⁴⁾。FUIは一人ずつ、録音データを聞きながら行い、FUI自体も録音した。FUIは1時間30分から2時間30分程度であった。

3.2 調査対象者

調査対象者となったNNSは全員、大学の短期留学生で、2004年10月に来日し、1年間の予定で滞在していた。NSも全員、NNSと同じ大学に在学する学生で、NNSとは友人、またはチューター⁽⁵⁾として関係を築いている。

王と智子、ワティと香織、ヨハンと真由美をペアとし、調査を行った。なお、調査対象者の名前はすべて仮名である。

調査対象者の簡単なプロフィールを表1に示す。

表1 調査対象者のプロフィール

NNS							NS			
名前	出身	年齢	性別	日本語 学習歴	日本語 能力	日本滞在 経験	名前	年齢	性別	NNSとの 関係
王 (O)	中国	30	女	12年	上級	なし	智子 (T)	20	女	チューター
ワティ (W)	インド ネシア	24	女	5年	上級	なし	香織 (K)	19	女	友人
ヨハン (J)	ドイツ	23	男	8年	上級	2回（3週 間ずつ）	真由美 (M)	22	女	チューター

3.3 分析の手続き

このような調査からNSとNNSのインターアクションを分析するにあたって、NSとNNSは役割を持っており、その役割にはホストとゲストがあるのではないかと考えた。また、

インターアクションを行う中で、NNSはさまざまな習得を行っていると考えた。

そこで、分析を行うにあたって、まずデータの文字化を行った。文字化に際しては、情報のやり取りが行われている場面、実質行動の調整が行われている場面など、出来事の連鎖を記述し、FUIも参考にしながら、参加者がどのようなタイプの役割を持っていたか、それはホストの役割かゲストの役割か、さらにその役割のタイプが変わったり、交替したりした場面はなかったかを分析した。

4 インターアクション分析

調査では、王と智子は近くのデパートに買い物に行き、ワティと香織は香織の家でそれぞれに料理を作り、ヨハンと真由美は野球観戦に出掛けた。以下で、それぞれのケースのインターアクションを概観し、そこから明らかになった情報ホストと情報ゲストという関係について述べる。

4.1 ケース1 ―王と智子―

4.1.1 インターアクションの概要

王と智子は調査のために、買い物に行くことを計画した。調査の時期にデパートなどではバーゲンが行われていたこと、王の家族（夫と息子）がその直後に来日することが、買い物に行く動機となった。智子自身はすでに数週間前に行われていたバーゲンで買い物をしていたので、特に自分の買いたいものはなかった。

2人は大学内で待ち合わせをし、自転車で大学を出発した。デパートに向かう途中、王の希望でドラッグストアに寄った。ドラッグストアでは、王が作ってきたメモを見ながら、母親に送るための貼り薬や子供の日用品、自分の薬などを購入した。

ドラッグストアでの買い物が終わると、インターネットでバーゲンについて調べたデパートに向かった。デパートでは、王の息子の水着を買うこと、王自身の水着と浴衣を買うことがあらかじめ2人で共有されていた買い物の目的であった。実際の買い物では、これらの目的以外のものを見たり、購入したりすることもあった。

4.1.2 インターアクションの特徴

王と智子のインターアクションは、常に王の買い物の目的に沿って進められていた。そして、王が智子に質問する、智子が質問に答える・アドバイスをする、王に希望をたずねるということが多く見られた。例えば、アクセサリー売り場での買い物の場面では、まず、王がアクセサリーを見ながらさまざまな質問をしていた。それに対して智子は商品についている割引を示すシールについて説明したり、値段を店員に確認したりしていた。

しかしながら、王は常に智子からの情報を元にインターアクションを行っていたわけではない。王は既に持っている知識や経験を利用して買い物をすることもあった。例として、ドラッグストアでの買い物の場면을挙げる。FUIで王は、子供用のシャンプーを探す際に、同じ系列の別のドラッグストアに行ったことがあり、そこには子供用品のコーナーがある

ことを知っていたので、このドラッグストアにも子供用品のコーナーがあるはずだと思い、子供用品のコーナーを探したと報告している。一方智子は、子供用のシャンプーが具体的にどのようなものであるか、そしてそれはどこに売っているのか分からなかったと報告している。

このように、王と智子のインターアクションは、王の買い物という目的に沿って進められ、智子が案内するという性格の強いものであったが、王もそれまでの経験などからある程度の知識をもっており、それは智子の知らないことであることもあった。

4.2 ケース2 ―ワティと香織―

4.2.1 インターアクションの概要

ワティと香織のケースでは、香織の自宅でお互いに料理を作って食事をした。2人は大学内で待ち合わせをし、香織の自宅に向かった。

香織の自宅に着いてから二人は1時間ほど雑談をし、その後、料理を作り始めた。ワティはインドネシア料理のミーゴレンを作り、香織は稲荷寿司を作ることにした。香織の稲荷寿司のほうが早く出来上がり、香織は途中からワティがミーゴレンを作るのを見たり、手伝ったりしていた。

料理ができると二人はテレビを見ながら作った料理を食べた。その後、テレビを見ながら雑談をしたりしていた。

最後にワティと香織で食器洗いなど、片づけをしてワティが帰宅した。

4.2.2 インターアクションの特徴

ワティと香織のインターアクションの特徴は、双方向の情報交換が行われていたことである。それは、香織がインドネシア人の男性と交際しているために、インドネシアに一度行ったことがある、インドネシア人との接触場面に慣れていることに起因している。このことと、互いに料理を作るというインターアクションから、2人のインターアクションでは、日本のこととインドネシアのことについて話す、情報を交換するということが多く見られた。例えば、料理をしている場面で、香織が稲荷寿司にゴマを入れると、ワティはインドネシアではゴマは普通お菓子里に使うと話している。それに派生して他の食材についても互いの国での扱い方の違いについて情報を交換していた。

このように、ワティと香織のインターアクションでは、その背景、インターアクションの性質から、情報を交換するということが行われていた。

4.3 ケース3 ―ヨハンと真由美―

4.3.1 インターアクションの概要

ヨハンと真由美はプロ野球観戦に行った。ヨハンは以前にもたまたまチケットがあったために、別の友人たちと同じ球場に野球観戦に行ったことがあった。ヨハンは野球の基本的なルールは知っていたが、ほとんど分からない状態であった。一方、真由美は、幼いころにはそのスタジアムに行ったことがあったが、最近はずっと行っていなかった。真由

美は野球のルールに関して試合の状況が分かる程度は知っていたが、特に野球に興味があるわけではない。

2人は大学内で待ち合わせをして出発した。二人は電車に乗ってスタジアム行きのバスが出ている駅へ向かったが、ヨハンの提案で出発駅と到着駅で飲み物などを購入した。

その後バスに乗り、スタジアムに行った。スタジアムに着き、席に着くとちょうど試合が開始するところだった。2人は買ってきたビールを飲んだり弁当を食べたりしながら野球を観戦していた。また、野球を見ながら野球とは関連のない会話などもしていた。

4.3.2 インターアクションの特徴

ヨハンと真由美のインターアクションにおいては、2人で野球観戦をするというインターアクションの目的があった。野球については、ヨハンはほとんど知らなかったため、真由美に質問していた。また、真由美がドイツのことについて質問していることもよくあった。

このように、お互いが知っていることがはっきり分かれていることがある一方で、そうではないこともあった。ヨハンは、スタジアムへの行き方、スタジアムの様子などについて、以前の経験から知っていることも多かった。そのため、実質行動を決定する際に、ヨハンの意見が参考にされることが多かった。例えば、スタジアムまでの行き方を決定する場面では、真由美はヨハンから電車の駅からスタジアムまでのバスがあることを聞いており、そのため、事前に経路を調べていた。しかし、経路が2つあったため、真由美はヨハンが以前に行ったときの経路を質問し、それによってスタジアムまでの行き方を決定している。

このように、ヨハンと真由美のインターアクションにおいては、他の2つのペアのようなはっきりとした役割関係はなく、交渉をすることで実質行動を決定していることもあった。

4.4 参加者の役割 —情報ホスト・ゲスト—

4.1から4.3で見てきたように、調査を行った3つのケースはそれぞれ性格の異なるインターアクションであった。しかしながら、そのインターアクションを分析することによって、接触場面における情報ホスト・ゲストという役割が明らかになった。

先行研究を踏まえ、本研究では、参加者が他の参加者よりある事柄についての情報を持ち、情報を持っていない参加者にその情報を提供する役割を「情報ホスト」、情報を持っていない参加者が情報を提供される役割を「情報ゲスト」とする⁽⁶⁾。ここでいう「情報」はある人が生活してきた環境、教育、経験などから得た知識全体を指す。また、参加者の既知の知識ではなくても、ある状況において知りえた事柄も情報という。例えば、時計や看板などからその場で分かったことも情報と言える。

また、情報ホスト・ゲストという役割は、文化的ホスト・ゲストという概念とは一致しない。文化的ホストという場合には、おのずから、ある文化を母文化として保持している参加者が、自分の母文化に関することについて説明をするという役割が見えてくる。したがって文化的ゲストは文化的ホストとなる相手の文化を知らない、知っていても文化的ホ

ストには及ばないということになる。

もちろん、情報ホスト・ゲストの役割と、文化的ホスト・ゲストの役割が一致することもある。日本でのインターアクションにおいて、NSが文化ホストとして情報ホストになることは、十分に考えられることである。また、本調査では、NNSが自分の国のことについて、文化ホストとして情報ホストとなり、NSと話している場面も見られた。

しかし、情報ホストと文化的ホストの役割は必ずしも一致するとは限らない。ヨハンと真由美のデータにもあったように、あるインターアクションにおいて、NNSのほうが情報を多く持っていることもある。

また、次の例では、話題にされている内容が、どの文化に属する事柄であるか、判断するのは難しい。

例1では、香織がワティに日本は醤油のにおいがするかどうか確認している。香織は、以前に本で外国人にとって日本で最初に気になるのは醤油のにおいだということを読み、思い出したので聞いてみたとFUIで述べている。また、ワティの「あー、あるよね」という発話を聞いて、「あるんだー」と思ったことも報告している。

【例1】

K: ね、日本でしょうゆのにおいするの？

W: ん？

K: なんかたまにー（うん）（2）日本のにおいはしょうゆのにおいって言うのを聞いたことが@

W: あー、あるよね

K: しょうゆっぽいの？

W: そう、なんだろう、しょうゆっぽい、なんだろうね、ま、そういうよねー、これー、だってそうめんとカー

K: あ、夏だしね

W: うん、そうそう

ここでは香織は本で読んだ知識について、外国人の一人としてワティに確認している。このような確認は、相手が外国人でなければできないため、接触場面特有のものである。

ここまで見てきたように、情報ホスト・ゲストの役割は、文化的ホスト・ゲストの役割と必ず一致するとは限らない。NNSがどのような事柄について情報ホストになっていたかを分析することで、NNSの習得している社会文化知識を明らかにすることができるだろう。また、NNSが情報ゲストになっている場合を分析することで、NNSがどのように社会文化知識を習得しているかが明らかになるだろう。

5 情報ホストと情報ゲストの関係

4節で見たように、分析の結果、NSとNNSのインターアクションにおいて、情報ホス

トと情報ゲストという役割関係が認められた。以下では、情報ホストと情報ゲストの役割関係の特徴を、特にその役割関係の可変性に注目して考察する。

5.1 役割の決定とその変化

情報ホストになるか、情報ゲストになるかは、参加者間の相対的な情報量の差によって決定される。情報ホストはその事柄について専門家（expert）である必要はない。

以下の例ではヨハンが真由美に、なぜ野球は同じ相手と何試合も続けて試合をするのかを質問している。ヨハンがなぜ同じ試合を2回するのかを質問をすると、真由美は2回ではなく3回か4回すると答えている。そしてヨハンがその理由をもう一度聞くと、真由美は分からないと言いながらも、その理由を答えている。ここでは、プロ野球で同じチームとの試合が実際に何試合あるか、そしてそれはなぜなのかは明らかになっていない。それは真由美が特に野球に詳しいわけではないからである。しかし、真由美はヨハンに比べれば野球に関する知識を持っていたために、情報ホストとなっている。

ただし、データを見ると、ヨハンは真由美の持っていた情報に納得していない。FUIでもヨハンは、真由美の答えは理由になっていないと報告している。

【例2】

J: でもなんでいつも一、試合は2つあるの

M: ん？ふたつって？

J: 明日も、同じ試合[あるんじゃない

M: [あー、うん、そうそうそうそう、たぶん、昨日、とかもやってた

J: え？

M: 3日間ぐらい連続で、同じチームと試合するの

J: 3日間？

M: 3日か4日ぐらい、もっとかな？

J: @なんで

M: @な一でだろう、わかんない、わかんない、だって広島からわざわざ[来てるからさー

J: [い、1回じゃ足りないの？

M: ん？

J: 1回で足りない？

M: だってせっかく来たんならさー、何回か試合して帰らないとさー、せっかく[はるばる広島から来たんだからさー

J: [@ばかがいるよ

M: なんで？@

例2では、まずヨハンが真由美に質問をし、真由美が答えている。つまり、ヨハンが情報の不足に留意し、情報ゲストとしての調整を行ったことによって、真由美が情報ホスト

としての調整を開始している。

しかし、情報ホストが、情報ゲストの情報の不足に留意し、調整を開始することもある。以下の例では、打球がキャッチされたので打者がアウトになったことを真由美がヨハンに伝えている。このように、ヨハンは野球のルールをあまり知らなかったため、周りの応援が盛り上がったときなどに真由美は野球のルールを説明していた。

【例3】

M: あーあーあー、取れっ、おーすごーい

(7)

M: 取ったの、センターで、だからあの人は、アウトになったの

J: 何でアウト

M: 取られたらアウトだよ

このように、情報ホスト・ゲストの関係は参加者間の情報量の差によって決定される。そして、参加者は情報の不足に留意し、調整を開始する。そのため、情報ゲストが質問などをしても情報ホストがその情報を持っていなかったり、情報ホストが説明などをしても情報ゲストが既にその情報を持っていたりすることもある。

さらに、これまでの先行研究のホスト・ゲストの役割関係が固定的であるのに対し、情報ホスト・情報ゲストの役割関係は可変的である。つまり、ある事柄については情報ホストになる参加者が別の事柄については情報ゲストになることもあるし、相手に比べて少ない情報しか持っていなくても、それが相手の知らない情報だった場合には、その事柄全体については情報ゲストであってもある部分については情報ホストになることができる。また、双方がある事柄について別々の側面から同量の情報をもっている場合にはさらに役割関係が複雑になる。以下でそれぞれ例を挙げる。

5.1.1 情報ホストと情報ゲストの役割が変わる場合

情報ホストと情報ゲストの役割は、互いの持っている情報によって、交替が起きることがある。上述のように、情報ホスト・ゲストの関係は可変的であるため、話題や実質行動の変化によってその役割も変化する。また、一つの話題の中でも情報ホストとゲストの役割が変わることもある。

以下の例は、王と智子が、体温計を選んでいる場面である。智子が情報ゲスト、王が情報ホストになっている部分には下線を、王が情報ゲスト、智子が情報ホストになっている部分には網掛けをした。

【例4】

O: でもこれ電池一交換ですね

T: うん、そうそうそう電池

O: うん、うん、だいじょぶだよX、もし、帰国したら、(うん)も使えますね

- T: うん、使える、使える
 O: あ、そう、だいじょぶですね
 T: え？電池一緒？王さん
 O: 電池ですね、ん？
 T: 電池、日本と一緒？
 O: 一緒です
 T: あー
 O: あ、これはど、え、どんな電池？
 T: どんな電池？
 (3)
 T: こういう電池
 O: あー、これは、なにか、中国にXXXいっぱいあります
 T: なんだっけこういうま、丸い電池だ
 O: うーん

この例では、その体温計に使われている電池については智子が情報ホストとなり、中国の電池については王が情報ホストとなっている。智子も王も、前に自分が情報ホストになった事柄について確認するために、情報ゲストとなり、自分が相手に伝えた情報が正しかったかどうかを確認している。つまり、情報ホストとしての役割を遂行するために情報ゲストになっているといえることができる。さらにこれらの確認は、王がどの体温計を買うかという実質行動を決定するために行われている。そのために、王も智子も情報をより確実なものにする必要があり、確認を何度も行っていたと言える。

5.1.2 情報の一部について情報ホストになる場合

相手に比べて少ない情報しか持っていないくても、それが相手の知らない情報だった場合には、その事柄全体については情報ゲストであっても、ある部分については情報ホストになることができる。

以下の例も王と智子の例で、2人が水着を買う場所について話している。この例でも、智子が情報ゲスト、王が情報ホストになっている部分には下線を、王が情報ゲスト、智子が情報ホストになっている部分には網掛けをした。

【例5】

- T: 浴衣は7階はいいとしてー、水着はどうしょっか、どこに見に行こっか
 O: 水着はどこに売ってますかー？
 T: どこ売ってたかなー
 O: 私、も、サンダルもXX@
 T: そうね、サンダルも買ってないね
 O: うん、なにか、き、えー、〇〇駅の地下？（地下？）の店ありますよね？あ、あ

るようですけど

T: 地下? ○○駅の地下?

O: XX、みせー

T: よ、洋服の?

O: うん、洋服じゃなくて普通の一なにか、あ洋服と、サンダル (うんうん) の店

T: あ、ずーっとえ、こ、あそこのこ、まーっすぐお店があるよ? (あー) 地下は、
あれだよ食べ物のお店

O: あ、地下は食べ物?

王をはじめ、「水着はどこに売っていますかー?」と智子に質問しているが、智子が答えないでいると、王が、「〈省略〉○○駅の地下? の店ありますよね? あ、あるようですけど」と近くの駅の地下に洋服などが売っている店があるのではないかと智子に確認している。つまり、この部分では王が情報ホストとなっている。

王と智子のインターアクションにおいては、全体的に見て、智子が情報ホストとなって買い物の場所を伝えていることが多かった。しかし、この場面では王が情報ホストとなっている。このようにNNSである王は、観光場面のように、まったく社会文化知識がないためにNSである智子に質問するのではなく、不確かではあるがある程度の社会文化知識を持っていることもある。この例では、結果的に王が持っていた情報は誤りであり、駅の地下にあるのは食べ物の店であるということを智子から聞き、その社会文化知識を修正することになっている。

また、情報量の差がないようでありながら、ある事柄についての一部の情報について情報ホストになることもある。以下の例では、香織がテレビに出ている男性がソプラノ歌手であること、ボーイソプラノであることをワティに伝えている。しかしそれはワティにとっては既に知っている情報であり、ワティは「そうそうそうそう、見た」と答え、その歌手の歌い方を真似したりしている。しかしワティは、そのソプラノ歌手が「もののけ姫の歌歌った」ということは知らず、新しい情報を得ることになった。

【例6】

W: ん

(2)

K: この人は一、なんかソプラノ、歌手

W: そうそうそうそう、見た

K: XXX

W: 〈高い声で歌う〉とか、すごーい、[この間

K: [ボーイソプラノの人

W: そうそうそう、すごいすごい、ソプラノだから、あ、XXX

K: もののけ姫の歌歌った

W: え、そう? 知らない

K: もののけ姫っていう映画知ってる？

W: うん、知ってる

K: あれの一、歌歌ってた

W: へー、すごいな

このことから、ある事柄についての情報は、1つではなく、いくつかの要素から成り立っていることが分かる。例6ではワティは自分の情報の不足に留意していないが、香織が情報ホストとして調整を行うことによって、その歌手に関する情報の新しい要素を知ることになった。それと同時に、この例は、社会文化能力の習得について、以下のようなことを示していると考えられる。

ある事柄について全てのことを知っているということが、社会文化能力を習得しているということではない。ある事柄の持つ、情報は、さまざまなものがあり、その一部を既に知っていることもありえる。この例のようにさまざまな側面からの知識を積み重ねていくことによって、社会文化能力の習得が進んでいくと言えるのではないか。

5.1.3 ある事柄について同量の情報を持っている場合

ある事柄について、同量の、しかし内容は異なる情報を持っていることもある。この場合には、双方が情報ホストとなる。

以下の例では、香織が、香織の自宅のコンロがワティの寮のコンロと使い方が同じであるとワティに伝えている。そして、そのコンロがガスコンロではなかったため、「火事にならないでしょ@」と言っている。

【例7】

K: これ寮のやつと同じだからさ、使い方

〈省略〉

W: あー、いいよね、たぶん私は使える@

K: うん、火事にならないでしょ@

W: 火事にならない@でもね、え、なんか何週間前かなー、(うん) ちょっとー、あの、なんか、あの、火事の一、アラーム？(うん) なってたよ、ウィーンとか、(たぶんねー) うるさーい、とっつもうるさかった、え

K: たぶんいたずらだと思う

W: いやいや、いたずらじゃないよ、みんなが、ちょっとあの一、部屋を出て、え、誰の部屋？とか

K: うん、前もあったよ、そういうの

W: [え、わたし

K: [なんかー、あとねー(うん) たまに間違えて押しちゃう人いるみたいでねー

W: あー、でもー、それ、あの一、あの人は実は料理作ったよ、でもー(うん) な、なんという煙が？(あーあーあー) たっくさん、で、出る？(うん) 出たからー、

ちょっと、あの人も全然気づかな、え、気づかなかったよだから（うん）自分の部屋@（えー）だと思わなかったよ、うん、えーえーとか、だから、誰かドンドンドン、えーだいじょぶーだいじょぶーとか

K: 大騒ぎだったんだね

W: うん、だ、えっと、しかもあの人は中国人だったよ@

K: あー、なんか煙の出る料理しそだよね

W: うん@

ここではワティが火災報知機が鳴ったときの体験を話そうとしていたが、香織が自分の体験から得た別の知識をワティに伝えようとしており、双方が情報ホストとなっている。最後の部分では香織がワティの話を認めており、ワティが情報ホストに、香織が情報ゲストになっている。

このように、NSとNNSが異なる情報を持っていた場合、お互いに情報を補い合うことができる。例7の場合は、NNSが自分の体験を語るという性質の会話であるが、これが実質行動に関わる会話の場合には、2人のインターアクションに大きく関わってくることになるだろう。

また、同じ事柄について同じ情報を持っているが、その評価が異なる例も見られた。以下の例は、2人が香織の出身地である銚子について話している場面である。ワティは以前に銚子に行ったことがあり、銚子についての社会文化知識を持っていた。そのため香織の出身地が銚子であると聞き、「けっこう有名よね？銚子は」と述べている。香織はそれに対して、「うーん、かも」とワティの発話に対して同意することをためらっている。それを聞いたワティは、「え、そうだよ？」と言って、自分が銚子は有名だと述べた根拠を説明している。そして香織はその説明を聞いて、「そうだね」とワティが「有名」と言ったことに同意している。

【例8】

K: ううん、銚子のほうだよ

W: あ、銚子、千葉県ね

K: うん、この間、旅行に行ったと思うけど

W: うん、そうそうそう、[銚子

K: [あの辺、あの辺、あの辺

W: あの辺@けっこう、有名よね？銚子は

K: うーん、かも

W: え、そうだよ？

K: [ほんと？

W: [なんか千葉県、に、ひとつ、なんか有名なところ、銚子、なんか歴史的に

K: そうだね、歴史的な（うん）やつはいろいろある

W: うん、そうそうそうそう

K: うん、(5) しょうゆ作ってるしねー

W: うん、そうそうそう、しょうゆ

例7でワティが伝えている情報はワティの体験であったが、この例で伝えている情報は、ワティが体験によって得た知識とその評価である。ワティが香織のあいまいな答えに対して反論できるということは、ワティが銚子に関する社会文化規範を持っていたということである。つまり、ワティは自分が持っていた社会文化規範から香織が逸脱したためにそれを留意し、調整を行っているのである。そしてその結果、香織の評価を弱い評価から強い評価へと変化させることができた。

ここまで見てきたように、情報ホストと情報ゲストの関係は固定的な関係ではなく、互いの持つ情報の量や性質によって関係が変化する。NNSは自分の持っている情報から時には情報ホストになり、時には情報ゲストになり、また、時には自分とは異なる情報を持つNSと交渉をしながらインターアクションを行っていると言えるだろう。

6 まとめと今後の課題

接触場面のインターアクションの参加者は、その実質行動を実現するために必要な社会文化知識の不足を逸脱として留意する。その結果、参加者は情報ホスト・情報ゲストとしての調整に入る。NNS自身が留意することもあれば、NSが留意して調整を行う場合もある。さらに、NSとNNSが互いに情報を補い合いながら、実質行動を遂行していくこともある。

こうした調整のプロセスから、情報ホストと情報ゲストの関係は、これまでの先行研究で見られたような、固定的な役割関係ではなく、可変的な役割関係であることが推察される。それは、情報ホスト・ゲストという役割関係が、使われている言語が母語かどうか、あるいは、母文化かどうかということによって決定されるのではなく、インターアクションに関わるもの同士の相対的な情報量の差によって決定されるためであると考えられる。

また、例6から明らかになったように、ある事柄についての情報はいくつもの要素から成り立っている。つまり、社会文化能力の習得は、その事柄を成り立たせているさまざまな情報を蓄積していくことであるといえる。そして同時に、村岡（2003）でも指摘されているように、その社会文化に対する自分の評価を決定していくその過程が社会文化能力の習得のプロセスであると言えるのではないか。

ただし、このような情報のやり取りが全て社会文化能力の習得につながるわけではない。例2で見たように、情報ホストは専門家ではない。NNSはさまざまな情報を評価し、取捨選択しているのではないかと考えられる。

本稿では、情報ホスト・情報ゲストという役割関係を中心に、社会文化能力の習得のプロセスの一端を考察した。しかし、さらに分析をすすめることによって、社会文化能力の習得のプロセスの全体を記述することが必要であろう。また、「情報」という概念にはさまざまな内容が含まれている。そのため、社会文化能力の習得を扱う際には、それがどの

ようなものであるか検討しなければならない。

【注】

- (1) 位地社会文化能力の習得を見ていくにあたって、言語に焦点を当てている母語話者・非母語話者という用語は適当ではない。しかし、他の適当な広く用いられている用語がないため、本研究ではこの用語を用いることにした。
- (2) 2.2を参照。
- (3) ここでのJは日本人、Mはハンガリー人の日本語学習者を指す。
- (4) 調査対象者の一人である王のFUIは計画通りに進まず、彼女の疲労などを考慮して2回に分けて行った。しかし、2回目のFUIは王の都合が合わず、調査から20日後になってしまった。
- (5) 調査対象者の所属する大学では、留学生に対するチューター制度を設けている。一人の留学生を一人の日本人学生が担当し、留学生と友人関係を築くと共に、留学生が日本で生活していく上でのアドバイス、レポートのチェックなど、生活面、学習面などをサポートすることが期待されている。
- (6) 伊東（2004）で「情報ホスト」、「情報ゲスト」という用語が使用されているが、定義はされていない。他の文献でもこれらの用語について言及しているものは見当たらない。案内場面においては、日本語を使用して案内を行う場合、日本人参加者が言語ホストになり、ハンガリー人参加者が言語ゲストになる。一方で、ハンガリーの観光地についての知識を持っているのはハンガリー人参加者であり、日本人参加者はハンガリー人参加者に情報を提供してもらうことを期待している。伊東（2004）ではこのような役割関係を「情報ホスト」、「情報ゲスト」と呼んでいるのだろう。

【参考文献】

- Fairbrother, Lisa C (1999) *The management of cultural deviations in contact situations*. Master thesis, Chiba : Chiba University
- Fan, S.K. (1994) Contact situations and language management. *Multilingua*, 13-3, pp.237-252
- ファン、サウクエン (1998)「接触場面と言語管理」『日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成』会議要録
- ファン、S.K. (2002)「対象者の内省を調査する（1）フォローアップ・インタビュー」『言語研究の方法—言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』くろしお出版、pp.87-95
- 伊東隆作 (2004)『案内場面における調整放棄—案内を受ける日本語母語話者を中心に—』桜美林大学大学院国際学研究科2004年度修士論文
- 金田智子 (1998)「異文化と接触するとき—留学生はどう対応しているのか—」『広島大学留学生教育』第3号 広島大学留学生センター pp.1-15

- 牧野成一 (2003) 「文化能力基準作成は可能か」『日本語教育』118号、日本語教育学会、pp.1-16
- 宮副ウォン裕子 (2003) 「多言語職場の同僚たちは何を伝えあったか—仕事関連外話題における会話上の交渉—」『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト』宮崎里司、ヘレン・マリOTT編、明治書院、pp.165-183
- 村岡英裕 (2003) 「社会文化能力はどのように習得されるか」『日本語準母語話者のコミュニケーション規範に関する調査研究』平成12年度～平成14年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書
- Neustupný, J.V. (1985) Problems in Australian-Japanese contact situations. In Pride, J.B. (ed.). *Cross-cultural Encounters: communication and miscommunication*. Melbourne: River Seine, pp.44-64
- Neustupný, J.V. (1994) Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and Kwan-Terry, J. (ed.). *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*. Singapore: Times Academic Press, pp.50-69
- ネウストプニー、J.V. (1994) 「日本研究の方法論—データ収集の段階—」『待兼山論叢』28号、大阪大学紀要、pp.1-24
- Neustupný, J.V. (1995) Some issues of ordering in interactive competence. B.Palek (ed.), *Proceedings of LP'94: Item Order in Natural Languages*, Prague: Charles University Press, pp.10-26
- ネウストプニー、J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- Neustupný, J.V. (1997) Teaching Communication or Teaching Interaction? *INTERCULTURAL COMMUNICATION STUDIES* NO.10, Chiba: Intercultural Communication Institute Kanda University of International Studies. pp.1-13
- ネウストプニー、J. V. (2002) 「インターアクションと日本語教育—今何が求められているか—」『日本語教育』112号、日本語教育学会、pp.1-14
- 由井紀久子 (2003) 「接触場面における言語現象の多元性—教材バンクの開発を目指して—」宮崎里司、ヘレン・マリOTT編『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト—』明治書院、pp.371-381
- 田中共子・秦喜美恵 (1996) 「日本文化理解のための教材構成の理論と思考—社会的分脈をとともう対話場面を中心に—」『日本語教育論集—世界の日本語教育』6、国際交流基金日本語国際センター、pp.13-34
- 田中共子、高井次郎、神山貴弥、村中千穂、藤原武弘 (1990) 「在日外国人留学生の適応に関する研究(1)—異文化適応尺度の因子構造の検討—」『広島大学総合科学部紀要Ⅲ』第14巻、pp.77-94

文字化の規則

文字化の方法は、Fairbrother (1999)、宮副 (2003) を参考にした。発話者はそれぞれの参加者の頭文字とした。なお、Sは店員など、調査対象者以外の発話である。文字化の記号を以下に示す。

- | | | | |
|--------|------------|-------|----------------|
| ・ 、 | 発話の区切れ | ・ 〈 〉 | 非言語行動、周囲の状況、 |
| ・ ? | 上昇イントネーション | | 省略など筆者による注釈 |
| ・ XXX | 聞き取れない部分 | ・ [| 発話の重なり開始部分 |
| ・ ー | 長音 | ・ () | 聞き手のあいづち〇〇 |
| ・ (数字) | 沈黙の時間 (秒数) | ・ | 固有名詞 (人名、地名など) |
| ・ @ | 笑い | | |

(うすい・ひろみ 中国湖南大学外国語学院日本語学部講師)